

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

e-mail: shakatsushin@mifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポビル九〇四 電話 03-3377-4649 FAX 03-33299-5367

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三二 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額 700円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言

現代のドン・キホーテ

滝野 忠……………2

鳩山首相は即辞任

「生きるために組織せよ」

編集部……………3

—兵庫・東京の仲間のたたかいから—

志ない新党結成……………5

改憲ムードは後退……………6

—憲法記念日の社説から—

「マルクスの将軍—フリードリッヒ・エンゲルスの革命的生涯」……………6

—「The Economist」誌書評より(二〇〇九年八月一日)—

「解決案」を批准……………8

—国労臨時大会—

抑止力も軍事的合理性もない沖縄・米軍海兵隊……………9

—沖縄タイムス・屋良編集兼論説委員が京都で訴え—

「みんなの話題に」地球温暖化とエネルギー問題の虚構……………11

—山住外国人の地方参政権は認めるべきだ

—山下けいきの議会討論—……………12

読者からのおたより……………14 編集部だより……………10

旬刊 社会通信

NO. 1072

二〇一〇年五月十五日号

二〇一〇年五月十五日発行
(毎月一日・二五日二回発行)

現代のドン・キホーテ

鳩山首相は即辞任

セルバンテス、一六世紀騎士物語『ドン・キホーテ』の筆者である。ドン・キホーテの正しき名はドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ。彼は槍と楯を手にやせ馬ロシナテにうちまたがり、従士サンチョ・パンサと放浪の旅に出る。現（うつつ）と夢の区別がつかない空者（うつけもの）で、愛姫ドウルシネア・デル・トボツソを求めたのである。一六世紀スペインは大航海時代の始め、封建制度から商品の自由な移行期にあった。封建時代の象徴だった土地地主⇨騎士が歴史の片すみに追いやられようとした時である。空者キホーテは封建時代の象徴としてあった騎士物語に現を抜かす。

現代日本にドン・キホーテは封建時代の象徴としてあった鳩山由紀夫、日本国宰相だ。彼は現（うつつ）と夢をまったくわからぬET人間であるかもしれない。誰もが「ひよつとしたら」と思い続けてきた。彼由紀夫の夢、「資本主義であるけれど人間的な資本主義社会をつくりたい」、「日米安保条約は日本国存立の柱、だが対等な関係を」、「沖繩海兵隊基地は海外、県外」は、資本主義という制度、米軍の沖繩じゅうりにさいなまれる庶民に夢を与えた。自民党失政が彼を宰相とした背景である。

夢は一日にしてくずれた。風車にたちむかうドン・キホーテよろしく、大軍を組織した沖繩、鹿児島徳之島に突進した。サンチョ・パンサは内閣の副官房長官である。彼らは「おやめなせえ、ご主人様に名案あるわけでねエでがんしょう。勝ち目のねえ時には待つことでごんす」と忠告したにちがいない。ドン・キホーテの由紀夫君、「ドウルシネアに会うためには漫遊こそ」と、ロシナテならぬ自衛隊機に乗り込んで沖繩へと駆け参じた。

夢を五月晴れの空に望む沖繩県民。ET宰相の「腹案とはなにか」を見守る全国民。結果は、ET宰相がドン・キホーテでしかなかったことだった。県知事、市町村長は、「会っても成果ない。だけど、首相がわざわざやってくる。門前払いとはいかない」との苦渋の選択だ。苦渋の選択はまさに「苦渋」そのものとなった。

ドン・キホーテ宰相は「すべてを県外に、というのは現実問題として難しい」、「沖繩にも徳之島にも率直に普天間の基地移設に協力を願えないかとの思いできた」と沖繩にさらに負担と危険を求めますがよろしくと、真の夢追う沖繩県民を足蹴にすることでしかなかった。鳩山に一国の宰相の資質がないことを更に示したのが次の発言だ。

①昨年「最低でも県外」と発言した際、私は、米海兵隊の存在は、必ずしも抑止力として沖繩に存在する理由にならないと思っていた。ただ、学ぶにつけ、沖繩に存在する米軍全体の中で海兵隊は、抑止力が維持できるという思いに至った。認識が浅かったといわれればそのとおりかもしれない。

②公約というのは選挙の時の党の考え方ということになる。私が移設先について、「最低でも県外」との発言は党ではなく私自身の代表の発言だ。自分の発言の重みは感じている。どうしても沖繩に一部の負担をお願いせざるをえない。

「ETって本当にばか、おれの方がまし」でいいのか。こんな低劣な人物には首相

はむろん国会議員はやめてもらおう他ない。

(滝野 忠)

「生きるために組織せよ」

―兵庫・東京の仲間のたたかいかから―

ユニオンの仲間が元気だ。専従者が低賃金あるいはゼロのなか、身体を張った活動で地域の中小、未組織の仲間たちを励まし続けていること、その活動に彼ら地域の仲間が信頼を寄せ始めていること。最近の傾向として山形・米沢市や茨城・土浦市の置賜ユニオン、茨城ユニオンに顕著だが、地方議員との連携がユニオンの信頼感を高め、組織の拡大に拍車がかかっている。

「凄まじい日程」武庫川ユニオン 地域ユニオンづくりのモデルは兵庫の仲間のたたかいだ。個々のユニオンががんばっているだけでなく、その活動が重層的であることだ。一五年前、神戸大震災は地域ユニオンの原型である被災者ユニオンをつくった。小西純一郎、塚原久雄、黒崎隆雄さんらの昼夜を分かたぬ活動が原動力である。

手元に「武庫ユニオン」(労働組合武庫川ユニオン機関紙、一〇年四月一日)がある。末尾の一八頁に「三月の活動日程」が記される。編集後記にJUNさんが「三月も凄まじい日程となった」と生々しく書き始めているように、まさに「すさまじい」の一語につきる、こうである。団体交渉二日、四日、一二日、一七日、一九日、二四日、二四日、二五日、二五日、三〇日、三〇日、地労委申し立て・裁判八日、一〇日、一二日、一七日、一八日、二六日、二九日、三一日、三一日、集会・労働相談等二日、五、六日、九日、一三日、一四日、一七日、一八日、二〇日、二四日、二六日、学習会等、五日、一二日、一六日、これらの間にユニオン劇団練習、機関会議である。三月、記されただけで四六もある。団体交渉そして裁判、学習会にどれほど事前準備が必要かは本誌の読者ならだれもがよくご存じのことだ。地域ユニオンには総評労働運動全盛期にあった活動家魂が再興している！

組織化は“重層的”ユニオンは三月二六日に結成された但馬(たじま)ユニオン結成で八つめに。兵庫県全体に張りめぐらされるまでになり、その数は二〇〇〇人に近づいている。

はじめに兵庫の運動は“重層的”といった。その一つにひょうご地域労働運動連絡会がある、この組織は〇四年十一月「県内地区労交流会の今後を話し合う場」として立ち上げられ、今では七地区労(尼崎、芦屋、神戸、明石、東播(姫路)、神崎、宍粟)、八単組(兵庫県職労、明石市職労、加古川市職労、全国社会保健職員労組兵庫支部、JAM神戸発動機労組、化学関連労働組合協議会、西日本N T T関連労組)約三万人で構成される。

二つは「生きるために組成せよ！」と〇二年から始められた「兵庫たたかう仲間の集会」だ。この集会の特徴は県下各地から「たたかう仲間」が相集い、その年組合つぶしや不当解雇など労働者の権利侵害と闘ってきた仲間たちが報告、激励し合っていることだ。手元のプログラムからその一端を紹介する。

〈オーブニング〉は「最近、集会で労働歌を歌うことがない。『明るく楽しく』労働運動をすすめるためにも歌も歌おう」と加古川市職労ギターサークル「アンチウオー（反戦）」が情熱のバラ、イムジン河、「花」を熱演。

〈闘いの報告〉では①ご存じ鉄建公団原告団「国鉄分割民営化と闘う」、②〇九年九月の「会社解散・全員解雇」に抗し闘い続ける全港湾神戸支部姫路伊藤分会の「小劇『勝まで闘う』」、③神戸ワーカーズユニオン寸劇「労働者派遣法の改正を」、武庫川ユニオン音楽隊の私は忘れない、翼を下さい、そして韓国労働歌「巖（いわお）のよう」に。その後、郵政民営化、自治体、「退職したいのに離職票がもらえない」との相談から構成されたダストマンサービズ残酷物語と続いた。

集会参加者は三百名の目標にまであと一步の二七〇名。基調提起は「労働組合運動の力のひとつが数の力、労働組合を死滅させないために、五年、十年先を見据えた次世代を作り、組織化をやりきる以外、私たちの道は残されていない。『生きるために組織せよ』、これが当分の間の合い言葉になる」と呼びかける。

兵庫の仲間はこの運動体を基礎に①ひょうご労働法律センター、②ひょうご労働安全衛生センターを組織されている。

東京でも「ユニオンネットお互いさま」 東京でも「兵庫や他にまけるな」と活動が始まった。ユニオンネットお互いさま第2回大会以降、一年二ヶ月が経過、一年ごとに労働者を取り巻く環境は悪化、闘う力を更に高めることが、重要な課題であることが明らかに。

結成からの一年は、お互いさまの存在感を認識してもらうことを中心に様々なことを行い、最初の相談者が来組したのは、結成から四ヶ月ほどたってから。その後は、継続して労働相談者が訪れている。

この間の特徴として、相談内容では、解雇、賃下げ、配転、休職からの復職、いじめ等。その背景として、利潤と生き残りを最優先する企業の非人間的な本質が露わに顕在化してきている。達成不可能なノルマを課し、恣意的評価が可能な業績査定制度を作り出し、何時でも労働者を切り捨てられる構造がシステム化。こうした、成果主義が賃金にとどまらず、解雇権の濫用と一体の問題として、企業が意識的に取り入れてきていることだ。

お互いさまは、この一年見てきたことは、企業（資本）が横暴を振るう中、生活と仕事に希望を持ち働いていた労働者が排除されている実態だ。私たちは、労働相談に訪れた労働者に激励と協力をしてきましたが、企業と闘うためには、お互いさま自身がいかに強くたくましくなる必要があるとする。

労働相談員の拡大を呼びかける。第一に、相談件数の増加もありますが、解決までの期間が長引くケースが増加していること。第二に、労働者の抱えている問題が複合的であり、労働法だけでなく、生活保護など生活に直結した諸制度の知識が必要となっていること。第三に、解雇だけでなく職場に留まりつつお互いさまに加入している組合員が増加していることなど。成果主義・業績査定など企業の手のひらの制度にどの様に反撃していくか、一つ一つに十分な検討が必要と。

志 ない 新 党 結 成

志。政治・生活のすべてである。志が大きく空回りするなんぞは、今の世にあってほめたたえられることはあれ、非難されることは一つもない。政治の目的は権力獲得だ。志の高い低いは「権力への道」と一体だ。

志高い政治勢力は己れを犠牲にしやがて来るにちがいない権力への道に邁進する。現勢力をなにごなんでも維持したいとする政党は、志清き勢力だけでなく、権力をも利用したいとする。孤高を誇る政党は資本主義は変わり、改革の積み重ねで資本主義に代わる「新しい」社会創造は可能と夢想する。

これらの中間にある諸個人は、資本主義という現社会を改良し、貧乏人をなくすためには発想の転換が必要と、大昔の空想的社会主義者や共産主義者が考え発表したと同じ思想を展開する。これらはすべて、マルクスとエンゲルスの科学的社会主義、『資本論』で全面的に批判された古い理論の現代版だ。

志ないのが自民党勢力だ。○九年八月衆院選で自民はたたきのめされた。目がさめるかと思いきや、相も変わらず権力党にあったかのような惰眠をむさぼり続ける。その現れが、自民党の旧き良き時代に想いをさせる老人連の分離・分裂だ。

「たちあがれ日本」だって？どこに向かって、誰がたちあがるのか。七十歳を超える老人が「誇りある日本の文化と伝統」、「自主憲法制定」。これは「真正保守」、天皇親政。与謝野さん、貴男のじいさん、ばあさんは「君死にたもうことなかれ」と明治の親政に反旗をひるがえした一族。平沼みたような極右反動といっしょじゃ、いかにもさみしい。

舛添新党はさらに情けない。みずから新党をつくるのじゃなく、改革クラブという明日にもエンマさまが三途の川への通行証を渡す集まりに、とりあえず借り住まい。その後、「新党改革」をつくるというのだ。改革クラブの連中は七月で任期切れ、再選はない。そこに舛添が「いっしょにどう」。改革クラブの古参連は「舛添なら三百万可能かも」、舛添は「政党要件みたしたい」で野合成立、この集団はカネカネカネ。志など一つもない。

渡部喜美率いる「みんなの党」は人気がいい。「なんで」と問えば、「？」。実体なしの空人気が実態だ。だから、参院選までには消えてなくなっちゃまう。

自民は第二次大戦後の六五年間、権力の座にあり続けた。第二自民党・民主に権力を奪われた。小沢、鳩山、渡部、羽田などは自民・田中派（経世会）。汚い手の内は見えている。本当に「戦争」をやれば、民主も自民も消えてなくなる。

そんな政治状況下、自民と民主の間に割って入ったのが松下政経塾の政党たちあげである「日本創新党」。党首は塾出身で都議、代議士、そして杉並区長へと変身し続ける山田宏。彼の思想は、胸につける青いリボンに示される。極右反動である。大昔一九九三年の日本新党の二番せんじなのだけれど、これに悪乗りしたのが、今有識者、昔の言葉でいえばルンペンインテリの弁護士出身・大阪府知事。彼は三十代ともっとも若い。それだけに日本創新党と連携するかのように、地域で力を蓄え、中央への進

出をくわだてる。

改 憲 ム ー ド は 後 退

— 憲法記念日の社説から —

鳩山政権支持率は釣（つるべ）落としです。今は春から夏へなのに秋から冬へというようにです。四月後半の支持率は日経二四％、共同二〇・七％、産経二五・四％、不支持は七〇％弱。鳩山沖縄訪問に「成果あり」という人は皆無ですから、支持率はさらに下がりますね。沖縄訪問は民主党にも壊滅的影響を与えるでしょう。

こんな中での五月三日。各紙の社説は「改正論議を危機打開の一助に」（読売）、「憲法審査会で議論を始めよ」（日経）、「中国の脅威増大に対処を 集団的自衛権で同盟立て直せ」（産経）、「失われた民意を求めて」（朝日）、「初心をいまに生かす」（東京）、「というものでした」。

日本の国民—その八〇％超は労働者—はマスメディアがつくる世論に敏感で、深く考える間もなく群れて流れるかのようにドドツとです。こうして、一九八〇年代の中曽根第二臨調から橋本六大改革、小泉構造改革の中、あれよあれよという間に憲法改「正」への国民投票法（二〇〇七年）がつくられてゆきました。現在は憲法問題どころじゃない。総中流社会の崩壊、経済成長停滞、その中の格差拡大をどうするかが焦点とされています。

「保守」、憲法改「正」を社論とする日経、読売、産経は「国の基本」（安保・外交）に立ち帰れと、憲法改「正」への道である憲法審査会が始動していないのは違法状態と「21世紀にふさわしい憲法づくり」（日経）、「憲法論議の再活性」（読売）、「憲法改正論議を始める意志がないのは、政権政党の責務の放棄」と、改憲への動きが鈍い民主を攻めたてる。

「改憲」に舵を切った朝日はおずおずと前三紙と一線を画す。部数が減りつづける中、はつきりと改憲論調をかかげれば社がなりたないとの営業方針からだ。朝日は北海道福島町（五千人余りの町）、東京三鷹市の市民動議（市民参加）を「熟慮する民主主義」とほめたたえる。中味についてはふれていない。文意からすれば「無駄をなくす」であるらしい。問われるのは、だれにとつての「無駄」かだ。まとめは抽象的で「政治と有権者の間に多様な回路を開く」だ。

東京は「本土の人たちが享受している平和と安定は（沖縄の）負担、犠牲の上に築かれていることに気づかなければなりません。」「第九条を自国に対する制約と考えるのではなく、日本国憲法の有する普遍的価値を国際社会に向かって発信してゆくことが、日本には求められる」と結んでいます。

「マルクスの将軍—F・エンゲルスの革命的生涯」

— The Economist 誌書評より（二〇〇九年八月一日） —

『資本論』 昨年（〇八年・編集部）の秋に金融危機が起こったとき、一八六七年に出版されたカール・マルクスの『資本論』が一躍ベストセラーにおどりだた。この本

の一巻では、容赦のない消費社会と、資本主義の自然の成り行きが言及され、またたくまに現代における新しい解釈が生まれてきた。マルクスは不滅の存在だが、一方でエンゲルス―マルクスの生涯の長きにわたって片腕を担い、『資本論』に多大な貢献をした―彼はほとんどかえりみられることがない。イギリスの歴史家トリストラム・ハントによるエンゲルスの新しい伝記はこの人物への再評価を促す一冊だ。

友情 マルクスとエンゲルス、この二人が親交を結んだのは一八四四年パリ、お互い二十代半ばのころで、マルクスが一八八三年に死去するまでずっと続いた。このふたりはライオンランド生まれだったが、(当時の絵を見ていただきたい。これは、彼らが当時発行していたライオン新聞の印刷室における写真である。中央、紙面を確認している人物がマルクス、その後ろでのけぞって呆けた顔をしているのがエンゲルスだ)まったくちがう環境で生まれ育った。マルクスの父親はキリスト教に改宗したユダヤ人弁護士、エンゲルスはプロテスタントの家庭で、紡績工場を所有する裕福な生まれだった。マルクスは法律と哲学を学び、エンゲルスは一家のやつかいもの扱いされて、一七歳で家族が経営する紡績工場へとばされる。一方、一八四一年ベルリンで兵役についたときには、プロシアの首都を席卷していた軍事熱にさらされた。

エンゲルスはその後、一家が経営していたマンチェスターの紡績工場に行く。一九世紀半ばの綿工業都市は工場主にとつては楽園であり、同時に労働者にとつては地獄であった。それがエンゲルスの勉学に好材料を与えた。すなわち経済要因が、社会の階級衝突の基本的な原因なのだ。一八四五年、エンゲルス弱冠二四歳のころ、どうすれば資本主義において成功できるかを学ぶのと同時に、反資本主義的な書『イギリスにおける労働階級の状態』を著した。この本では、細部にわたって現代における生産活動の非人間的な有様をあきらかにしている。

エンゲルスはやがてマンチェスターをはなれ、マルクスとともに『共産党宣言』を書き、一八四〇年代、ヨーロッパ中を旅しながら同時代の革命を追い、最後にはまたイングランドにおちつく。マルクスはここで『資本論』の執筆に着手したが、問題があった。マルクスには貴族出身のドイツ人妻と幾人かの子どもがおり、何不自由ない裕福な暮らしを望んでいたが、生計を立てるためのあてはなにもなかった。

援助 エンゲルス(この名前はドイツ語では「天使」という語に似ている)はここで驚くほど寛大なことを申し出る。マンチェスターに戻り、嫌悪していた紡績家業を再開し、マルクスが執筆するやがて世界を変えるだろうこの書物の完成に必要な費用を与えたのだ。ここから二〇年間、エンゲルスはときに不愉快になりながらも働き、収入の半額を、マルクスが必要とするならさらに多くを分与したのだった。エンゲルスは懸命に働きながら同時に、そこから執筆の参考となるようなアイデアや実際の事例をいくつも出していった。ついに『資本論』一巻を脱稿したとき、エンゲルスは仕事から解放され、ロンドンのマルクス一家の家の近くに移り住み、経済の動向を読み書きながら知識人としての生活を送ったのだった。

エンゲルスは謎の多い人物でもあった。政治の分野では才能があり、情熱的で、魅

力的であり、それでいてマルクスの脇役に徹する気持ちがあった。「マルクスは天才だ。われわれはその才能に尽くしたのだ。」友の死の時、エンゲルスはこう言った。伝記の著者ハントはこの二人の政治的、社会的、哲学的尽力に、現代における意味を明らかにしたという点で優れている。複雑で追いつく流れだが、我慢して読む価値は十分ある。

背が高くてハンサムで、エンゲルスは机上の仕事もよくできたが、同時に人生を謳歌することも忘れなかった。ワインの趣味があり、女性を大切にし、チェンヤー（イングランドの州）に狩りに行ったが、これらのことはすべて労働者の骨の折れる仕事の上に成り立っているということは、それほど気にかけていなかった。家庭内の彼の生活はマルクス一家に負けず劣らず因習にとらわれない自由なものだった。彼はときおりアイルランドの半文盲の労働者の少女メアリー・バーンズと暮らした。彼女が死の床にある時、姉のリジー隣席のもとベッドで一度かぎりの結婚式を挙げた。

エンゲルスはマルクスの死後も献身し続けた。マルクスの遺族に生活の援助をし続けるだけでなく、数年がかりで、マルクスが『資本論』二、三巻を書くために残した莫大なちりぢりのメモ書きを集めた。集めたものを見ると、結論が消失している部分が多くあるのは避けられなかったが、ときにはマルクスが考えていたよりもさらに革新的な結論が引き出せることもあった。『資本論』三巻でマルクスは、利潤追求ばかりしていた企業が、やがては失墜してゆくはめになると説き、かつこの利潤追求が資本主義社会を「かき乱す」ことになると言った。エンゲルスはこの「かき乱す」を「破壊」とおきかえ、二〇世紀マルクス主義者によってさらに根源的な解釈がなされるようになったのだった。

献身 エンゲルスは一八九五年に死ぬ。最後まで控えめだった彼は親友の眠るロンドンのハイゲイト共同墓地に埋葬されるのを遠慮した。彼の灰は、マルクス一家と幸福な休日と共に過ごした、イングランドのイーストポーン海岸にまかれたのだった。

（廣井 綾乃訳）

「解決案」を批准

― 国 労 臨 時 大 会 ―

一〇四七人問題「和解案」承認を最大課題とし、国労は四月二六日臨時大会を開いた。和解案の内容は第一〇七一号（五月一日付）ですでに報じた。大会の雰囲気、方針、論議を簡潔に伝えたい。

会場は社民党本部の社会文化会館。地下鉄麹町駅から国会図書館をぬける。制服姿のおまわりさん。「どこへ」。「社会文化会館へ、何かあるの」と私。「混乱してる。なんのため」とおまわりさん。「取材だね」。こんな会話を三回くり返し、社文へ。一部妨害勢力に緊張し警備する国労組合員の中を会場へ。

方針案は大きな任務に①到達点の確認、②緊喫の諸課題の実現、③これからの組織展望を掲げ、最終解決への諸課題に①「解決案」の受諾と鉄運機構の裁判上の和解手

続き承認、②未解決の雇用問題での取り組み強化、③闘争団のあり方等への機関上の諸手続き、当面の取り組みとして①和解手続きとして四つの裁判取り下げ、②J R復帰を望む二百人の雇用実現要請、③中央・地方での報告集会実施とともに、④国労組合員が闘争団におこなってきた援助金を六月末に打ちきるとの方針だ。

大会会場は、二三年を越えた闘い、不十分だが解決への道を切り開いたという自信からであろう、落ち着いていた。遺影を抱える闘争団員たちも。

大会は委員長あいさつ、そして解決案に労をとった四党（三与党と公明）担当者が来ひんとしてあいさつ。闘争団家族、闘争団の他、四人の代議員が発言した。

委員長、来ひんあいさつもそうだったが、論議は「解決を歓迎、最終解決は雇用が決着した時」。高崎、北海道の代議員は方針案「J R産別の企業内労組として社会的責任を自覚した未来志向の国労運動を見据える」に、国労を企業内労組と規定することと異議を唱えた。方針は拍手で採択された。

抑止力も軍事的合理性もない沖縄・米軍海兵隊

— 沖縄タイムス・屋良編集兼論説委員が京都で訴え —

沖縄から米軍基地撤去をめざす歴史的な沖縄県民大会の前日、四月二四日、ラポール京都ホールで屋良朝博・沖縄タイムス論説兼編集委員を講師に迎えて、一般公開の平和講演会がもたれた。主催したのは京都総評のOB・OG組織である「京都高齢者退職者協議会」（会長・谷内口浩二）。退職者や労働組合員、一般市民もまじえて百三十人が参加した。

講師は「日米安保体制と米軍再編——普天間移転問題で問われるもの」と題して、米軍再編の動きや実態をスライドを使って実証的に分かりやすく具体的に説明をした。屋良氏の講演の特徴は、沖縄基地問題を闘っていると思っている私たちが常識とと思っていることも一から問いかけ、自らの足と口を使って掘り下げ、根本的に「常識」そのものを転覆させ、歴代自民党・公明党政権や現・鳩山政権が言っていることのためらめさを暴露して、私たちに闘いの展望と勇気を与えてくれる点である。

それは、もともと沖縄・宜野湾市・普天間に海兵隊の基地があったのではない。一九五六年までは山梨や岐阜にあったのであり、「本土」では日本国民世論から言って部隊・基地継続が限度であり、軍事的合理性はむしろない朝鮮民主主義人民共和国からかえって遠隔地である沖縄に急遽移転したのである。沖縄なら押し付け可能だと判断した政治的判断であり、沖縄県民への差別・分断の思想と判断があったということ。そしてマスコミは連日朝昼晩と普天間問題を報ずるが、一度も海兵隊とは何か、その内実はどうか、どうしたら移転させられるかというようなことを報道してないとも。海兵隊とは海軍の沿岸対策、切り込み部隊からの歴史がありロビー活動で生き残ってきた海軍付属部隊であり、繰り返し返すが軍事合理性でなく米軍最高幹部の気分感情や政治的判断で縮小・再編を続けてきた歴史であり（ウィルソン国防長官の決断、ラムズフェルド・稲嶺会談など）、個人的判断・見解では超大型移動式ヘリポートを借り上

げる資金援助をこそ日本政府が行ったらずに解決する問題であるとも。その移動式大艦船で太平洋を移動していくのが一番軍事的にも合理的であると。

これらのことを二〇〇七年から一年間休職して海兵隊の本拠地ハワイで徹底取材し、『砂上の同盟・・・米軍再編が明かすウソ』（沖縄タイムズ社刊、二〇〇九年）として纏（まと）めた。

「今日、米軍普天間基地の辺野古移設問題に象徴される米軍再編とはいかなるものを解明した意欲作。沖縄になぜ米軍基地が集中しているのか、米軍にとって沖縄はほんとうに軍事的な最適地、戦略的な位置なのか、といった視点から米軍再編の実態を明らかにし、沖縄に米軍基地を置く必要はない、との方向を打ち出すに至っていない。『沖縄の基地問題を考える上で示唆に富む著書』とされました」（沖縄選出・糸数けいこ参議院議員HPより）。第一五回平和協同ジャーナリスト賞奨励賞受賞もむべなるかなという、ジャーナリストの真骨頂ともいえる。

講演後の質疑応答は公演時間をはるかに超えて、熱心に丁寧に答えられた。基地をなくしても沖縄はやっていけるのかと言うよくある質問には、「基地は何も生産しない。返還後は生産活動が可能となり、税収は五十倍、六十倍になる。あの広大な普天間基地でも日本人労働者は二〜三百人という単位にすぎない。」などなど。

参加者からは、「私たちの知らない沖縄の現実をさらに発信して、本土のメディアを動かしてほしい」「日本の真の民主主義と平和を勝ち取る闘いだ。きょうの参加者総意で、明日の沖縄県民大会に連帯を贈り、京都でもさらに米軍基地撤去の闘いを繰り広げよう」と定刻を超えて発言を求める挙手は止まらず、平和・オキナワへの思いあふれる講演会として、絶妙の日程設定もあり大きく成功した。

（二〇一〇・五・七、稲村 守）

◇ 編集 部 だ よ り ◇

▽小沢一郎民主党幹事長が「最終決算」という参院選まで二ヶ月。「最終決戦」とは民主が単独過半数を獲得すれば自民は崩壊し、民主一党独裁政治体制への思惑、そして、六八歳で次回衆院選には七〇歳を超える己の肉体とがないまぜのスローガン。

▽小沢は百人を擁立。二人区以上の選挙区ではすべて複数候補をたてる。鳩山支持率は二〇%台と候補者、かつぎ手に疑心暗鬼が濃くなった。ポスターが巷にあふれてふしぎじゃないが、目立つのは公明と共産のみ。民主はない。参院選までにリーダー交代？

▽老人が逃げ出した自民は八三人を擁立。特徴は公募と若がり。支持率は上がらずここも疑心暗鬼。ポスター張りだしは鈍い。

▽元気いいのは「みんな」だが、支持率上昇に確たる根拠はない。ボヤツとした霞のようなもの。自民から割って出た連中には勝てる見込みはない。「統一候補」もさくになるのは必至。

▽共産は議席倍増をねらい、社民は現状維持、積み増しをねらう。

「みんなの話題に」地球温暖化とエネルギー問題の虚構

「温暖化対策＝原発」なのか

今の日本で、ほとんど信じられているのが、「気候変動＝地球温暖化＝CO₂排出、そのためにCO₂を出さない原発だ」である。実はこの等式は比較的ニューバージョンなのだ。

七〇年代初期の石油危機の時代、「石油はあと二〇年もすれば無くなるので原発しかない」。そして「石油より原発は発電コストが安い」として九州にも玄海原発など多くの原発がつくられた。もちろんCO₂のことなど全く話にも無かった。あれから四〇年たつてはるかにエネルギー消費が増えた現代でも、石油はあと四〇年持つとされている。当時は運転後の廃棄物処理は可能なのか、どれくらいのコストがかかるかなど、ほとんど無視され問題にもされなかった。

環境問題が深刻化し出した九〇年代からは、最初にあげたイコールの等式にもとづいて「環境問題の解決は原発推進」となった。温暖化とCO₂増加と直結して認めない研究者は世界的に多数いる。だが、一番利害が少ないはずの大学教員も、原発問題に対して公式に意思表示する者は圧倒的少数である。

先日、鹿児島大学で講演した世界的な研究者のアラスカ大学教授、地球物理学、赤祖父俊一氏は「温暖化とCO₂問題はイコールではないと明言できる」と学問的に解説し、そのことで日本政府は他国に利用されてはいけないと彼の政治的見解を表明した。しかし、では、CO₂問題イコール原発増設をどう考えるか、と私が質問した事に対して「政治的見解は出来ない」と見解を表明してくれなかった。

戦争と原発

原発は戦争を上回る潜在的危険性をもち、原点はやはり戦争である。

第二次大戦前、ナチスドイツは水と電力を国家管理にした。それに習って日本はそれまで地域ごとに多様に存在した電力システムを国家管理とした。戦争に国民を駆り立てるには国民に首輪と鎖をつけなければならない。国民にとっての首輪と鎖になるのは生活にだれも必要とする水と電気だと日本はヒットラーに教えてもらった。日本の場合、水はどこでもあるので電気であった。

戦後、復興に必須な電気をつくる電力会社は特別扱いされ、電力供給義務などはあったにしても、国の保護のもとで地域独占が許され、電気代と絶対損をしない営業利益を保証された。独占と引き換えに国家は電力会社に原発を押しつけた。原発と核兵器は技術的にほぼ同じであること、民衆への鎖として原発による電力体制が一番有効であることだと思われる。

自然エネルギー…肯定して否定

一九八〇年代の九電広告は、カルフォルニア風車ファームに感動している幼い女の子へ、当時高名な映画監督が、「理想と現実の違いです。風車で賄えるエネルギー

はほんのちよつとですよ」と論ず構成だった。基本的には今も同じ路線のようだ。自然エネルギーという誰でも認め望むものを肯定して否定する戦法である。

「泥棒にも三分の理」と言うが、何故そんなに風車建設を認めないかの三分の理はもちろんある。風車のように変動する出力では、安定供給が困難で、送電線の負荷が掛かりすぎる恐れがあるから、と言うのが最大の理由である。大型発電所からの電気は巨大送電線からだんだん分散して、最後は街頭の電線から各戸に供給されている構造だ。独占する側ではこのように中央集権型の構造が有利なことは明らかである。そうした構造（今の現実）になじまない風力発電をできるだけ排除という話である。

地域分散型エネルギーシステム

電力を中央から末端へ供給という、一方通行道路みたいな構造でなく、一般道は誰でもどこにも行けるように、発電と消費が網のように互いに繋がった構造にすべきである。この構造は既にデンマークで現実化されている。自然エネルギーだけでなく、地域ごとの小規模コジェネレーションで五割以上の電力が賄われている。地域ごとにあるコジェネレーション施設、風車などが互いにつながり、全体として余剰電力や不足分は互いに補われる構造である。

原発は発電量の二倍のエネルギーを温排水として海に捨て、海生物も殺している。地域コジェネレーションでは温排水も配送し暖房などの熱源に利用できる。現在、多くは天然ガスを使用しているが、バイオガスに移行はすぐにも可能である。温排水が暖房など（夏期には冷房にも）に使えるので、総合的効率はこの最新型大型発電所より高い。

現在、電力会社は太陽光発電以外、余剰電力を買電しないので、稼働率が限定され、コストも下がらない。もし国が、省エネ、CO₂削減のために真摯に考えているなら、政策としてコジェネレーションの買電をさせるべきなのだ。

「原発反対、自然エネルギーを」というだけでなく、エネルギーによる中央集権を支える構造をいかに解体し、地域分散型エネルギーシステムを構築するかが、未来を造る鍵だと思う。

（月刊 まちづくり 八・六ニース」No.一九〇、二〇一〇年三月二五日より）

永住外国人の地方参政権は認めるべきだ

— 山下けいきの議会討論 —

今回出されている意見書は地方の意見を重視せよ、国会での拙速審議に反対と述べ、一見、慎重審査を求める内容かに見えます。しかし議会前に出された当初案には「他国による地方政治への内政干渉も懸念されている」、だから法制化するなという文言があり、反対に限りなく近いものでありました。

今回案も永住外国人に対する地方参政権付与については「民主主義の根幹にかかわる重大な問題である」と述べ、「憲法上問題があると考えざるを得ない」との否定的な認識を示した上で、慎重な対応を求めるものとなっています。

私が今回意見書に反対する理由の一点目は民主主義と地方自治の観点からです。

政治理念としての民主主義でいえば、政治的決定に従う者は、当然その決定に参加できる者でなければなりません。その点で日本における政治的決定に従わざるをえない外国人に参政権を保障するのは民主主義なら当然のことでないでしょうか。

また地方自治体の運営は、すべての住民の参加によって進められ、住民の要求にこたえ、住民に奉仕するものであります。外国人であっても、我が国の地方自治体で住民として生活し、納税をはじめ、一定の義務を負っており、そういう人々が地方自治の担い手となるのは、憲法の保障する地方自治の根本精神と合致するものであります。

二点目は世論の高まりであります。

現在、日本に居住する永住外国人は一般永住者五〇万人、特別永住者三二万人といわれており、本市（大阪府茨木市）にも今年二月時点で二五〇三人の外国人登録者がいらつしやいます。毎日新聞が昨年一月下旬に実施した全国世論調査で賛否を尋ねたところ、五九％が賛成と答え、反対の三一％の倍近くに上っています。

自民党支持層でも賛成が四九％と、反対の四二％を上回る状況でありました。また朝日新聞の今年一月の調査でも賛成六〇％、反対二九％となっています。

三点目は憲法に違反どころか憲法の理念に合致すると考えるからであります。

確かに一九九五年の最高裁判所の判例で、憲法が選挙権を保障しているのは日本国民との判断は下されていますが、これはその当時の判断です。

傍論として「法律をもって、地方公共団体の長、その議会の議員等に対する選挙権を付与する措置を講ずることは、憲法上禁止されているものではない」との意見も示されており、国民世論の高まりの中、立法措置を講ずるのは当然のことでもあります。

違憲でないから、鳩山現内閣も、また政党においても民主党一五回、公明党二九回、共産党一回、保守党一〇回、自由党一回と法案を提出しており、また社民党、新党日本も賛成しているのであります。

地方参政権の付与は今後進めるべきであり、参政権の否定は人権、平等、民主主義の遅れに他なりません。各地の住民投票条例は永住外国人に住民投票への参加の権利を付与しており、地方参政権の前進であると私は高く評価するものであります。

四点目は永住外国人への地方政治参政権が世界の流れになっている点です。ヨーロッパではほとんどの国が地方参政権を認め、ニュージーランド、チリにおいては国政レベルの選挙権も認めています。日本における永住外国人への地方参政権の保障は、以上の国際的な流れにも合致しているのではないのでしょうか。

最後になりますが、国際化の時代に、昨今の偏狭で稚拙な排外主義は目に余るものがあり、その点からも、この意見書には断固与したくないと私は考えています。

*なおこの案件に対する質疑者、討論者は残念ながら山下だけでした。

（大阪府茨木市議 山下 けいき）

◇読者からのおたより◇

残りカンパ 購読料一年分です。残金は少ないですがカンパです。(岐阜・K)

編集部より いつもニュースお送りいただき感謝です。

努力 遅れてすみません。いい仕事ができているませんが、引き続き努力します。一年分とカンパです。(鳥取・Y)

編集部より お心使いに感謝です。賃金制度、搾取が存在するかぎり労働運動は消え去ることはありません。かならずよみがえります。

てんやわんや 誌代一年分送りますのでよろしくお願います。来年で定年を迎えますが、勤務先の県立施設は一名の欠員。五名で毎日がテンヤワンヤです。(自治労・Y子)

編集部より 労働組合幹部の多くが企業業績、あるいは自治体「経営」にと視野を狭められた結果、どこの職場も人がいない。これが自殺、精神疾患の第一の原因。

発展を祈念 長い間「社会通信」送付ありがとうございます。おかげで情勢を学ばせていただくのと大でした。今後の貴誌の発展を祈念し、カンパ一千円を送らせていただきます。(神奈川・O)

編集部より 社会通信は今年十一月一日でまる三十四年にもなります、こんなにも長く続けられ心から感謝です。さらにもう一ふんばりの気持ちです。

同時選挙あり? 民主党のエライ人の発言がバラバラ、仙石さんが普天間が破たんした時、「解散同時選挙も」なんてしゃべり、メディアが悪乗りしています。そんなことあるわけありませんのにね。(東京・K)

編集部より 民主党幹部がでんでバラバラに発言しています。世界観、政策はむろん氏も育ちも違う連中ですから、それはあたりまえ、「権力」を求心力にまとまっていく他ないのが現状。おっしゃるとおりありません。

資料です 遅くなりましたが、二月に開催された中央委員会に関係する資料を送ります。忙しいとは思いますが、一読され批評していただけると幸いです。(独立行政法人・C)

編集部より 民主党と支持協力関係もちながら独立行政法人への危機感が大きいのにあらためて驚かされました。たとえば、「民主党の掲げる政労連組合員にとっては歓迎すべからざるものを含んでいる」といったようになります。委員会での貴君はじめとするお仲間の「真つ向批判」の発言に心打たれました。

一〇春闘学習会 三月末、山形県米沢市で米沢地区平和センター主催の上記学習会。特に目を引いたのは民間労組で頑張っている世紀労組。雇用を守りスト権を確立して春闘を闘う決意をしている。そしておきたまユニオン。現在六分会二六〇人、学習会にも多くの仲間が参加した。(千葉・M)

編集部より 米沢、おきたまの仲間の活動は大躍進中。勉強させてもらってます。

「えちごユニオン」結成 三月二〇日、個人が加入できる労働組合「えちごユニオン」結成大会が開催。新潟県内全域から約二十人が参加、連合新潟、県労連には属さず独自に労働相談実施へ。委員長に選出された県職労OBは「県内は広く、一人で悩んでいる人は多い。気軽に相談できる新たな受け皿としたい」と語った。(新潟・K)

編集部より その後のおたよりでは順調に発展中とのこと。

滝野忠さんへ 死せる湖とその蘇生のための、飯島博さんの講演会場でお会いできるとは思っています。編集部より 「アサザは、湖の危機を知らせる『坑道のカナリア』」が、印象。(損酒乱)

編集部より 私は釣り好き。たまにはフナやワカサギを、でも霞ヶ浦ではちつとね。

引越しました この度、私ども下記の住所へ移りましたのでお知らせ申し上げます。こちらへお越しの際にはぜひともお立ち寄りください。(千葉・I)

編集部より 「ご連絡ありがとうございます」。

「教員免許状更新講習」を受けて 講習「教育の最新事情」を受け、某大学へ二日通いました。せまい机で八十分授業を八コマ受け、子どもたちの苦しみ(！)を実感しました。しんどかった講習の中で一筋の光。とても人間味のある大学教授が「現在の指導は受ける側が納得のいくものではないので単なる指示だ。教員が『交流感・有能感・自己決定感』を持たねば、子どもがそれを持つはずがない」と。心に響きました。(教師・N)

編集部より 現場とのふれあいこそが、教師と生徒との心の交流が教育の原点です。